

## 白河学フィールドワーク6

修学遠足

平成21年11月29日(日)

テーマ . . . . . 社川の流れ、と都々古和気神社の風景

目的地 . . . . . 社川玉野堰、棚倉町馬場都々古和気神社、八槻都々古別神社

浅川町城跡、白山比咩神社、石川町石都々古別神社、光国寺和泉式部堂

### 棚倉町 社川、玉野堰

午前9時の集合に3名、玉野堰に1名、合計4名の寂しい遠足となる。天気快晴。

天王内集落、とても興味がわく地名ではないか。近くに天王神社がある。(この付近に堤、逆川などの地名があり、玉野堰に関係がありそうである。)その境内集落なのであろう。この地区に住む仕事仲間の藤田君から玉野堰の地図を描いてもらってある。集落から北方向に社川があった。橋から下流に堰が見える。川沿いに下ってゆくと堰の手前に水を送る青い手動のハンドルバルブが



三個所あった。そのどれからも多量の水が土手を割って分水路から出てゆく。三方分水といわれる訳が見て分る。しかし、玉野地区はかなり下流の集落であるのになぜ、玉野堰なのであろうか。そしてその一流れが社川から別れて棚倉町久慈川へ流れ、常陸の国から太平洋に注がれる。社川本流は阿武隈の水と合流し、宮城の海へと流れ行く。まさに、此処が分水。

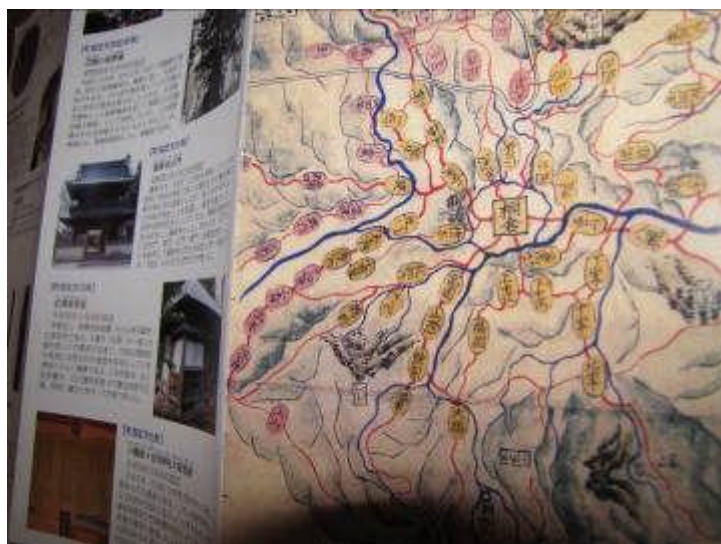
[写真左=社川、玉野堰]

棚倉町の指定文化財のパンフレット表紙になっている「幕末の領内絵図」を見るとブルーの色で社川と久慈川が繋がっている。人為的な掘削水路のにおいがする。堰堤の土手に昭和27年と昭和17年の改修竣工碑があった。棚倉町史を開くと1576年佐竹義重に奪われた赤館を会津芦名盛公が社川に玉野堰を設け分水嶺を掘割り、水攻めとする戦略の川が根小屋川である、との説明がある。しかし、久慈川、根小屋川の水位よりは棚倉の町や城は高台にある。水の供給の為、玉野堰、棚倉堀(現、玉野堰から赤館沿いに根小屋川に流れる檜木川のことだろう。)が使われたと思われる。此の水は棚倉亀ヶ城の内外堀を満たし旱魃時、其処からも農地へ導く用水システムが出来ていたらしい。

子供の頃、棚倉で育った私は根小屋川で魚釣り(ハヤ、オイカワ、ヤツメウナギ、ナマズ、ウナギ、カジカ、コイ、フナ等)をして遊んだ。猫谷川だと子供心に思っていた。今はその根小屋川も久慈川も改修され、50年前の面影はなく、流れもか細い。浅川町の城跡の案内看板に集落を宿と呼び、

根小屋宿などがあることが記してある。根小屋は集落名であった。

[写真右=棚倉町の指定文化財のパンフレットのパンフレット]



## 棚倉町馬場

### 都々古和氣神社

久しぶりに故郷の杜にたどり着く。なかなか生まれた里の神社へ訳もなく訪れることは誰にでも稀

なことではないだろうか。今日は白河学の遠足、とてもよい機会である。バイパスの方から車で行くと旧参道と直角にぶつかり、一の鳥居を右に見て左折して二の鳥居に着き駐車。脇に懐かしい棚倉町道路基点の石杭が埋められている。此处を基点とする何らかの理由を調べてみようと思いつながら遅い紅葉のまだ美しいモミジの下から石段を登ると、子供の頃の記憶が一段、一段蘇ってくる。随神門の背に巨大な鉾を左右に一对立ててある。これも何か表郷、三森武鉾山や天栄鉾衝山と関係あるかも知れない。随神門の天井に描かれていた消えかかった龍の絵に皆、感慨深げに見上げている。苔むした石敷きの参路の先に古さびた重みのある拝殿、本殿が囲い塀に守られている。境内は広壮で樹木は皆古木で空を覆っている。心の中にまで木漏れ日が差し込んで、深く鎮んで落ち着いた気分させる。『日本廻国記一宮巡歴』を書いた川村二郎は梅雨時に棚倉駅から歩いてここを訪れている。

「・・・神域は驚くほどさびれており、社殿の規模はかなり大きい素木造の拝殿も本殿も枯れ切った感じで、同じ素木の神門の随神にはどういわけか手首がない。屋根は多分、銅板なのだろうが黒いトタンのようにみえる。人工が自然に帰する一歩前のジメルのいう「廢墟の感傷性」に近い気分が森の中にたちこめているかのようで、呆然とたたずむ頭上、そそり立つ大杉の梢をかすめて郭公が啼きながら飛び過ぎた時、ふっと気が遠くなりかけた。」と我が家を批評されたように書かれているのだが、ここ7年程東北の神々の杜を歩いてきた私には別の気分が沸き起こった。現代の私達には古代から神が人を、人が神を産み、畏れ、慈しんだ昭和30年頃までの舞台の幕は閉じてしまっていることは重々承知した上でしか生きられない。しかし、人も5



0を過ぎる頃までには死をもって次の命への継承を実感する。死は再生と同じことでそこから生まれる畏怖と尊崇は神を産み出さずにはおられないのだ。今、都々古和気神の境内の全ての建造物、樹木、石、苔に至るまで古さびて、神を再生してゆくのだ。いま、まさに古さびて神は生まれけり、と。

多々ある末社や本殿の奥に東照宮まで遷座されている。照の字がれっかの部首が火で書いてある、あとで調べると異体字にはないがれっかとひへんは同じで、火や輝きに関する動作を表す、らしい。此の辺りから奥の森にかけて何やら古代の祖廟のような雰囲気 of 地面が続いている。



都々古和気本殿

境内で神職の角田氏に出会い、話を伺うことが出来た。皆に一部ずつパンフレットを頂いた。

氏の話と沿革を読めば、807年大同2年田村麻呂による味耜高彥根命と日本武尊の奉遷は現棚倉城址であった。1624年丹羽長重が築城時、馬場に旧社殿解体、移築した、とある。しかし、わたしが気になるのはそれ以前の此の社が何だったのかである。二千年前(と記してある)の表郷建鉾山が古代祭祀場であったのはもちろん、移転された400年前までの此の社も古代人の祖先廟であったのではないかと勝手に考えるからだ。都々古和気の社名に関して都々は星ではないかと角田氏は話してくれた。

### 棚倉町八槻

#### 都々古別神社

馬場の社から今は町内を通らず久慈川の右岸をバイパスで行くとあっという間に近津八槻社に着いた。子供の頃棚倉町内に住んでいたのだから都々古別神社の祭、八槻さまに行くにはバスや列車で行くしかなかったほど遠方で、車社会への変貌は時間を戻して



みると大変なものであると、改めて気付く。先週の日曜日は石川町の石都々古別神社の祭市が開かれていて、それも「八槻市」と呼ばれている。

国道289号線の拡幅工事のため、社脇の道は風景が一変しようとしていた。石柱に「国幣中社 都々古別神社」と彫られている。以前には国幣中社の文字はコンクリートで埋め込み消されていたような気がする。明治の合祀令などの歴史的背景が窺われる。

馬場と比べて社殿も新しく朱色の塗装もまだ鮮やかである。社務所にも窓が開いていてお守りや小物や御神籤が売られている。参祀者も私達の外にもいわきから訪ねたと言うご夫婦が居て、珍しい社殿の床下の裳裾建築物や本殿をカメラに収めている。



境内の北側は崖となって川へ切り落ちている。

宮川である。すこし下って久慈川と合流する。水源は八溝山から山本不動尊を経て当社へ流れる。会津伊佐須美神社も博士山、明神嶽からの水流は宮川であった。

八槻社には「陸奥国風土記」逸文が残されており、日本武尊が槻弓槻矢により八人の土蜘蛛を退治したその矢が芽を出した、との創祀伝承を持つのは有名である。ツツコワケの社号の謂れをツツコ藁苞から農業神味耜高彦根命で祀り始まったとするが、リーフレットやお守りを皆で購入すると巫女姿(と思った)の若い女性から話を伺え、都々、は王化の進んでいない陸奥と進んでいた下野、常陸の境、つまり都と都、ツとツを別つ位置に定めた社という意味なのでは、と説明した。先の神職は白河高校で教鞭をとり野球部の名監督でしたが先年早折なさり、娘さんが努力して職責を取得、お母様、妹様と当社を守っている、と聞く。若い神主からいくつもの興味ある話が聞けた。一宮が宮城県塩竈神社に移ってしまったと言われるが、仙台が栄えるようになって、そう言われただけで、今一宮は此方である、と言い切る。帰って一ノ宮について調べると、橋三喜「一宮巡詣記」や室町時代の「大日本国一宮記」、などの古文書が多くあるが定かなのは特になく、伴信友も正式なものではなく時勢、便宜定めたものである、としている。越中、越後など混乱も多くあるのだ。

また、八槻家が守ってきた宝物や神仏習合の時代の大善院のこと八溝嶺神社、日輪寺、月輪寺とのかかわりなども説明を受け、満足の遠足であった。

## 浅川町

### 白山比咩神社

浅川町を見下ろす城跡山公園から社川を鳥瞰して、遠足の定番、おにぎり昼食とする。浅川の町を社川が曲がって石川方面に流れてゆく。その風景を皆古代人になったつもりでポットのコーヒーとおにぎりで見渡す。遠く那須の嶺も関山も武銚山も美しい。この公園も館跡であった。このところ白河学で学んだ館跡に敏感になっていた皆はしきりに歴史的看板に眼を通すようになってきた。



城址公園頂上の八幡社

看板の地図に麓に白山比咩神社があると明示されているので地図をたよりに細い道を車で辿る。なかなか見つからなく、諦めかけたとき、大きな神社の看板を発見、予定外の見学地であるが、とても厄介で不可思議な社を見つけてしまった。と言うのも中島村で以前に白山比咩神社を見つけ、大変難しい白山信仰の一端を知ったからである。石段を登るに従い神神しい風景となる。石段と同じ勾配で小沢が急な水を山から押し出す。左に折れて何もない箱のような門のようでもある建物を



潜って上の本殿を拝む。新しい本殿は簡素で元々の境内も狭い。社の背に仰ぐ山は城山となる。

【写真左=白山比咩神社】

朝川町の町史には菊理媛、伊弉諾尊、伊弉冉尊を祭神とし1146年白石相模守朝光による加賀からの勧請、1411年浅川大和守義斉の建立とある。明治41年の合祀令で小社16社を合祀した、とある。

境内看板にハクサンとルビがふってある。浅川町の公民館で聞くと、過去ハクサンを通してきたが現神主がシラヤマと呼び、町内は今、どちらも呼んでいる。しかし、ハクサンとシラヤマは別の信仰

であるはずと説明してくれた。

## 石川町 光国寺

### 和泉式部堂

石川町は山間部には平地が少なく坂が多い。よって道は曲がりくねって遠望が利かず道に迷う。地図を頼りに光国寺を探す。先に和泉式部の生誕伝説のある小和清水を見つける。3人ほど観光客が清水を汲んでいる。すこし登って光国寺を見つけ、庫裏の奥に寺院とお堂がある。住職の奥さんらしい品のいいおばあさんに参拝の許可をうける。「银杏の実が落ちていて、踏むと靴が臭くなるよ。」と告げられる。なるほどご神木のような银杏は葉と実を落とし尽し、辺りは黄色の絨毯を敷き詰め、足場はない。皆、意を決し、踏みながらお堂へ進み、遙か昔の美しき歌人を拝む。鍵のない堂の扉を開け、彼女の部屋を覗いたような気になって、不思議な気分。恋多き古代の女性を思い浮かべた。帰りにおばあさんから式部の伝説を伺う。地元で式部伝説がありながら私達は和泉式部を何も知らない。急いで文庫本の「和泉式部日記」を購入する。

和泉式部 生没不詳、越前守雅致の娘、橘道貞と結婚、冷泉帝皇子為尊親王や弟の敦道親王と恋に落ち、歌、日記に残す。

いやはや、文によるアクティブな恋路、人目憚らぬ恋愛は携帯電話のメールに心揺らす現代人のそれと何も変わらない。そして各地に式部所縁の地があり、なおさら出生は伝説となる。



银杏の絨毯に映える式部堂